



こころざし

【学校教育目標】
夢の実現に向かって たくましく
挑戦する児童生徒の育成

唐津市立加唐小中学校

第 17 号

令和6年12月20日発行

文責 校長 多久島 一仁

武寧王について学びました

12月12日（木）に武寧王についての講話がありました。講師は、まつろ・百済武寧王国際ネットワーク協議会理事の先生でした。先生は、初任時の勤務校が松島中学校で、その後、教頭として加唐中学校に勤務されており、加唐小中学校とはゆかりの深い方です。

武寧王が生まれたのは聖徳太子よりも前の古墳時代だったということを知り、相当昔の方だったのだと思いました。武寧王が生まれる前からすでに日本（当時は倭）と百済は人も物（鉄など）も交流があったそうです。そして、武寧王をおなかに宿したお母さんと、叔父に当たる人がどうして日本にやってきたのか不思議でしたが、王家の血を絶やさないためにやってきたのだということを知りました。今のような頑丈な船が当時はあるはずもなく、それでも海を渡ってやってきたということは、それだけ戦乱が激しかったことを物語っています。また、それだけ日本という国が百済から信頼されていたのだと思いました。



オビヤ浦には井戸がありますが、この井戸は武寧王の産湯としても使われたという伝説があるようです。そもそも井戸というものはだれかが掘って、石で周りを囲ってできるものです。たどり着いたオビヤ浦に偶然井戸があるのも奇跡のようであり、その当時、加唐島に住んでいた人が武寧王の出産のために井戸を提供したのでしょうか。もしそうなら、加唐島は相当歴史のある島ということになり、どのようにして生活していたのか、どれぐらいの人が住んでいたのか、興味をそそります。

今年度は様々な形で武寧王や韓国のことについて学習する機会がありました。子どもたちもこれまで以上に加唐島の歴史について興味をもってくれたように思います。

世界を旅してみんなに伝えたいこと

12月18日（水）のほんわかタイムで、先生がお話をされました。先生のご家族は先生が生まれる前、フランスに住まっていたそうです。先生は2歳の頃、アルバムを見て、外国旅行の写真に自分が写っていなかったので、毎日泣いていたそうです。それを見て不憫^{ふびん}に思ったご両親が先生を連れてフランスに連れていかれたそうです。それをきっかけにして、様々な国を旅されました。



今回話されたのは、カンボジアに行かれたときの話でした。先生が行かれた所は、木よりも高いものがないくらい平らな土地が広がっていて、マンゴーが1kg70円で手に入るくらい物価が安かったそうです。そして、電力事情が悪く、日が沈むと寝て、日が昇ると起きて活動するような生活だったそうです。

先生にはカンボジアで働く、かもちゃんという友達がいる、旅行の前半はかもちゃんと過ごし、学校で日本語の授業を行ったこともあったそうです。旅行後半は一人旅をするため、かもちゃんと離れることになったのですが、その瞬間、突然恐怖が襲ってきました。それは、言葉も通じない知らない国で、知っている人もいない中、どうすればいいのだろうという不安があったからでした。

あるレストランに入ると、以前見かけた人と同じテーブルに座ることになりました。その人はダンさんという人で、カナダの方でした。その時に先生は思ったそうです。だれも知っている人がいないのなら、「友達つくればいいじゃん!」と。そう思ったことで、それからの旅行は楽しいものになり、学校を建てる作業に参加するなど、いろんな経験ができたそうです。

先生がこの旅を経験してみんなに伝えたいと思ったのは、

- ① みんなの目は 正しいもの・美しいもの を見るためにある。
- ② 世界（新しい場）は 自分 でつくる。

ということでした。

世界は広く、私たちがまだ目にしたことのないものであふれています。ですが、それをどう見るかは自分次第なのだとすることを教えてもらったように思います。

